

第1回新神戸地域ビジョン検討委員会 会議録

日時

令和2年8月4日（火）14:00～16:00

場所

新長田合同庁舎（神戸県民センター）E、F会議室

内容

議題

- （1）検討委員会委員長の選任について
 - （2）新しい将来ビジョンの検討の進め方について
- 意見交換

出席者

委員長	星 敦士	副委員長	乾 美紀
委員	井上 哲	委員	岩佐 光一朗
委員	梅澤 章	委員	児玉 充弘
委員	関口 幸明	委員	辻 幸志
委員	徳永 恭子	委員	永吉 一郎
委員	飛田 敦子	委員	宮定 章
委員	森田 祐子	委員	渡辺 元樹

（欠席者 なし）

県庁

ビジョン課職員 森川 智弘

県民局

神戸県民センター長 城 友美子
神戸県民センター副センター長兼県民交流室長 今後 元彦
神戸県民センター県民交流室次長 柳田 順一
総務防災課ビジョン担当班長 西川 理
総務防災課ビジョン担当職員 田原 由加里

内 容

議題(1)について、新神戸地域ビジョン検討委員会設置要綱第4条第2項の規定に従い、委員の互選により星敦士委員を委員長として選任した。

議題(2)について説明がなされた後、意見交換が行われた。主なやりとりは以下のとおり。

(委員長)

今回は一回目ということで、委員の皆さんがどのようなお考えをお持ちか一人一人から聞かせていただければと思う。

(委員)

私の専門はマイノリティの子ども達の教育なので、資料3でいうと、4番目の多文化共生の実現になる。資料2、4を見ていると、外国人に接する機会が増えているという結果を見て、国際化しているという印象を持っている。

今、外国人が沢山来ていて、特に入管法が改正されたり、日本語教育推進法もできているので、そのあたりにすごく関心を持っている。

外国人の子どもを対象とした学習教室を行っているが、本当にバックグラウンドが多様になっていることに驚いている。今まで見たことがないような国の子どもたちの相談に乗っており、こういう子どもたちを支援していくことを議論できたらと思う。

まず一つが、子どもたちの進学である。多文化共生を実現するためには、子どもたちに教育を受けてもらって、地域に貢献してもらおう人材になればと思うが、高校や大学に進める仕組みがない。一応、特別枠として外国の方たちが高校に行きやすい制度があるが、まだまだ高校に行けずに工場で働いて、親と同じような立場になってしまう子がいるので、進学、どうやって教育を継続できるかということを考えていきたい。

また、資料の2と4を見ると、自立社会の仕組みで、ボランティア等で社会のために活動している、またはしてみたい人の割合が増えているので、マッチングできないかと思っている。外国人の子どもは増えているし、外国人の人たちも多く見かけられるようになった。そして、日本人である地域住民は、ボランティア等で社会のために活動してみたいとあるので、ここを上手くマッチングできるシステムを作ることができたらと思う。

親がコロナで失業している子ども達が多くいるので、そういう子どもたちへ経済支援もしないといけないし、教育の継続をしないといけないということで、非常に課題は多いと感じる。

(委員)

神戸に住んだというと、他の人から羨ましがられ、神戸には神戸らしさがあるように感じている。神戸らしさは何かということ、海や山があって、ロマンチックであって、外国の方も増えているし、おしゃれでもあるし、ほどほどの距離感で他人様との付き合いがある。そんなものが渾然一体となった漠然としたようなものだろうと考えている。

どのような地域にしたいかということ、神戸らしさを残しながら、住みよい街、住みたい街、例えば安心であったり、公園があって、快適であったり、それから、そんなに貧乏じゃない地域であることが必要だと思う。

それ以外に、住んでいる人が明るく元気に住めるような街でありたいと思う。明るく元気で住めるような街というのは、例えば情報量が多いこと。商店街からのイベントや行政の催しだとか、各種団体の出来事だとか、新しい情報がどんどん入れ替わって発信している状況だと思う。そして、自己実現ができる街でありたい。団体やグループが色々あって、自分なりにある程度満足できるようなことが活動できるような街がいい。

さらには、神戸で最先端の医療だとか、コンピューター技術が有名であるが、市民が具体的に他の地域の人に自慢ができるようなものがあるような街。

適当に人が入れ替わって、神戸らしさがありながら、色んなものが入り混じった街であればいいと思う。

(委員)

北に六甲山、南に、大阪湾や瀬戸内海、非常に自然に恵まれており、魅力ある都市として、神戸は大体ベストセブンに入っているような町なので、外からみても魅力的な町だと評価されていると思う。

充実した医療というのは、地域で安全安心して暮らせる町にするために必要だと思う。より魅力のある町にする、という意味では、真剣に取り組んでいきたい。これは兵庫県だけではなく、神戸市も関わる部分のため、力を合わせて、充実していただけたらありがたいと思う。

また、観光も、魅力ある都市の中に必要な一つである。観光にも力を入れて、たくさんの方に神戸に来てもらいたい。

(委員)

神戸の魅力とは、ダイバーシティではないか。日本で最もダイバーシティな町ではないかと考えている。

神戸は非常に寛容である。多文化であり、あらゆる価値観をお互いに認め合って、受け入れる寛容な町、というのが神戸の一つの価値観だと思っている。

また、多様な自然と町があり、非常にゆとりのあるライフスタイルや生活ができるのではないか。外から入ってこられた方も、神戸で暮らしてみると、多様なチャレンジができて、そこでそれぞれの価値観に基づいて多様な挑戦ができる。その多様性といったところも非常に魅力ではないかと思っている。

教育の話もあったが、非常に外国人の子供が増えている。神戸は、人口が減少しているが、特に外国人だけは増えている。本当に多様な国の方々が神戸に来られているところである。子供の頃から外国人と接することによって、広い視野を持つことは、神戸ならではだと思ふ。

また、小さい頃から、国際的な教育の機会に接することは、神戸ならではのことなので、機会を増やして行って、それが将来、今後の人生で、世界でどうやって活躍していくか。世界標準の基盤として神戸で教育を受けて、子供たちが、将来自分がやりたいことは何かというのを、まず学んでいる時代から探していく。そういうことが神戸でできる、というのが本当にダイバーシティと寛容の魅力だと思っている。

あともう一つ、神戸は、産業構造が少し古くなってきている。新しい持続可能な産業、将来の成長産業を育てていかないといけない。今、神戸市は水素などをやっているが、2050年に向けて、これから再生可能エネルギーは100%になるかもしれない。ガソリン車も走っていないかもしれない。価値観が変わって、産業構造も変わっていく中で、新しい産業を神戸で育てていかなければいけないし、神戸に呼んでこなければいけない。そうすることによって、持続可能な町として神戸の魅力が、今後30年たっても生きていくのではないかと思う。

医療や防災については、今回のコロナで露呈したが、平時からの備え、ゆとりを持った備えというのが大事であって、効率性を追求し過ぎても駄目ではないか、という観点も必要だと考えている。

(委員)

農業のことが中心になるが、神戸は非常に多様性がある。特に山があつて、海があつて、川があつて、そこに町がしっかりとある。西区や北区の方には農村地帯や田園地帯があるという環境である。

資料2-1に、人口や面積がでているが、農家が人口に占める割合は、今のところ、約1.3%かと思う。兼業農家も含めての数値になるため、人口で見ると、比率としてはごく一部になってくる。ただ、面積で見ると、約9%強の面積になるかと思っており、557平方キロメートルのうち51平方キロメートルぐらいあるかと思っている。神戸市を全国の100万人以上の都市と比べたときに、農業の総生産高は、おそらく圧倒的に高かったのではないかと記憶している。統計年度によって相当違うようだが、それでも他を圧倒するぐらいに農業がしっかりとある都市である。

30年後に向けて、それがどういうふうになっていくかを考えたときに、地産地消の運動が以前からある。農業は食べ物を生産する、それを地域の中でしっかりとみんなで食べていく、という文化みたいなことができれば、地域が豊かになっていくかと思う。

また、農業には食べ物以外にも、環境保全や景観保全の意味もある。例えば、神戸市の下水処理場からリンを抽出して、それで肥料を作って、その肥料を使って専業農家を作って、作ったものがスーパーに並んだり学校給食に提供されたりということをして、この2、3年行っている。こういった取り組みについても、より幅を広げていくと、30年後、もっと地域の中で、食や農産物が活躍することができるのかなと思っている。

また、地産地消をしながらであるが、神戸の中には、圧倒的なネームバリューを持っている農産物ブランドもあるので、PRをしていくことも進めていくことができると思う。経済の中で、農業がしっかりと価値を持つという形で、輸出強化を含め、色んな文化との交流の中で生まれてくる価値を農業として生んでいきたい。

農家は結構頑張っている人が多くて、しかも神戸の農家は若い人が多くいる。平均年齢も若いので、そういった今の力を30年後につなげていければというところが、実際に一番強く感じるところである。

(委員)

県民センターの作成資料には、神戸の目指すべき姿として、「活力ある都市」と「豊かに暮らせる都市」の二つが挙げられている。都市に活力があるとは、ヒト・モノ・情報の流れが活発という事であり、豊かに暮らせる街とは、住みやすさとか、働きやすさが実現でき、楽しく安心・安全に暮らせる街と考える。「都市の活力」と「豊かな暮らし」とは、切っても切り離すことができない関係にある。都市に活力があるから質の高い生活を得ることが出来、質の高い生活を実現できる街だからこそ多くの人や企業を呼び込めるという事だ。

私達が2年前に作成した経済ビジョンでは、神戸に世界中から多様な人や企業が集まり、その連携・交流が活発に行われる街を目指すとした。神戸という街は、快適に住み、学び、働ける街だから、国内外から多くの人や企業を集めることが出来る。港を中心に発展してきた神戸の現在は、空港、新幹線、地下鉄など陸・海・空の交通ネットワークが他都市と比べても充実しており、非常に便利で暮らしやすい街だ。ヒト・モノの流れをよりスムーズにするためにも、空港を中心にした交通ネットワークがいっそう重要で、都心部の移動の円滑性や利便性向上を確保できれば、より多くの人や企業を呼び込めると提案している。

また、神戸はモノづくり企業をはじめ色々な産業が発達してきたが、今後はデジタル技術の活用が鍵となる。これまで培ってきた神戸のモノづくり産業の強みとデジタルテクノロジーをうまく掛け合わせ、新たなイノベーションを次々と創出し、成長分野の産業を発展させていくことが重要と考える。

一方、企業の大多数を占める中小企業の活性化も非常に大切だ。イノベーションに挑戦し、経営革新に積極的に取り組む企業を創出し、街に暮らす人々の働ける場所として、雇用をいかに多く生み出していくかという視点は絶対に欠かせない。

今回の新地域ビジョンは30年後の2050年を展望年次としており、10年後の将来像を描いた私どもと期間の違いがあり、状況もまた刻々と変わってくると思う。しかし、神戸という街が目指すべき基本的な方向は変わらないと考え、紹介させて頂いた。

(委員)

一つ、キーワードとしては神戸だからできるということがある。青少年団体の連絡体がNPO 法人化したというのが全国で初めてである。他の都市部では、力がなくなって、事業もできないので辞めますと潰れていくというのが現状だが、なぜ神戸だからできたのか。

他の都市から、神戸だからできたよね、と言われるが、良い意味でも悪い意味でも、神戸という土地柄として海からきたということを考えると、新しいもの好きで、そういったことに持っていく力があつたのかなと見られているのかと思っている。実は、当事者からすると、特に神戸の青少年行政とともに長年青少年行政を行ってきた流れがあつたため、青少年行政と団体と力を合わせて新たなものを作っていこうというのが、神戸にはあつた。これは地域力であつて、市民力かなと思っている。

少し話がずれたが、青少年育成支援、居場所づくりが私の研究の主たるところになる。30年後に青少年とか子供の居場所はどうなっているのか、地域の中でどうなっていくか。おそらく子供たちの数は絶対的に減ってくるので、その一人一人にどう関わっていくのかが、非常に大きいと思う。

社会の変化に沿って、子供たちの育成っていうのも、合わせていかなければいけないかなと思っている。青少年活動団体が活発な時には、地域のおじさん、おばさんが、子供たちをよく知っていて、何かおせっかいをしてくれる。それも今の町中では見なくなってきた。大人も居場所をつくるために関わっていくということ。資料3でいうと、多文化共生や交流拠点に付随すると思うが、そういった居場所づくりが一つの論点になればと思う。

もう一つは、国際交流である。神戸は、色々な国の方々が住む町ということで人口が増えていることを考えると、国際交流的、要はグローバルな人材育成が必要となる。グローバルな魅力という地域力指標があるが、国際交流を実体験から学んだ若者が、グローバルな人材になり、地域を、神戸を支えることで、若者が流出している神戸を何とか食い止める一つの要因にならないかと考えていければと思う。

子育ては皆さんクローズアップするが、ここ30年間を考える中で大事なものは、そのプロセスにある小学生や特に中・高生世代の育成かと思う。実は学校教育以外のところでの補完、学校教育の隙間を埋めるために、そのプロセスを大事にすることによって、30年後に40代50代と神戸を支える人材になる青年を、いかに神戸の魅力ある地域で支え、育成教育してきたのかが、30年後に問われるようなビジョンができればと思う。

(委員)

コロナが、起こったあとに驚くべきことが起きた。新聞の部数が、減っていく中で新聞が売れた。我々もびっくりした変化であった。

なぜか売れたのかと調べたり聞いたりしていると、自分が住んでいる場所の感染状況を詳しく知りたいということであった。さらに、自分のかかりつけ医はどうやって探したらいいのか、学校が今どういう状況になっているのか、という自分たちの生活に関わる地域の情報が知りたいとのことである。

さらに、読者の方からのご意見や感想を聞くと、テレワークやステイホームで、あまり外に出歩かず、遠いところに行かなくなったため、家の周りを散歩したり、近所をぐるりと回っている、という人が増えた。例えば子供食堂であるとか、地域の困っている人を助けるような活動に、今だったら自分が参画できるんじゃないか、というような声も聞いた。

これが、いわゆる40代や50代ぐらいのサラリーマンの方、働いている方である。地域を見つめたら自分にできることがあるのでは、という声があること、これは大きな変化だなと思った。

そういう地域に向ける視点や沢山ニーズがあったときに、やっぱり情報を求めていると感じる。何ができるのだろう、ここはどういうものがあるのだろう、来月どんなことができるのだろう、という情報を取りまとめる必要があると感じた。

一方で、情報が沢山あればいいかという、いわゆる自粛警察だとか、あの店が夜遅くまでやっているようであるとか、或いは感染者が出た医療機関に対しての中傷的な物言いがあなどるなどのマイナスの面もある。

地域を豊かにするためには、よりよい情報の出し方や発信の仕方を、考えていかないといけないと思う。それが地域社会で、皆さんと共有することができればいい。

また、神戸をどのような地域にしたいかを、地域の皆さんが考えられるような情報を発信する仕組みとして、生活者目線で施策など各ジャンルの内容について情報を縦軸とした仕組みができれば、良い地域になるのではと思う。

もう一つはその姿を描いていくにあたって、大切にしたい点である。

30年後ということで、若い世代の方々、子供たちや学生さんを上手く使って、若い皆さんがどういう地域にしていきたいか、どういう将来を描いているのか、ということをしっかりフィードバックして描いていければ、このビジョンを発表するときに、ビジョンの中身もさることながら、策定のプロセスが、多分、ニュースになると思うので、そのような視点を大切にしていただければと思う。

(委員)

IT 業界は今回のコロナで、本当に大きく変わった業界の一つだが、実は、変わったと言っているのは日本だけである。欧米は元々、どこにいても仕事ができるという採用方法、仕事の仕方であるが故に、最高の頭脳がどこの地域でも集まってきて、最高の仕事をしてくれるというのがある。

東京の最大の問題は何かというと、便利だと言われている都心の駅に人が集中して、住んでいるところのすぐ近くにはタワーマンションが建って、行き帰りにはぎゅうぎゅうの状態。私はずっとあれを異常だと思っていた。やっぱりそれは合っていたなとよくわかった。

神戸の人は、よく神戸が好きだと言っている。ホテル関係の社長と話をした際に、今回の3連休で、あるホテルは宿泊率が100%を超えたと言っていた。しばらくは本当に困っていたのに、高いところから埋まっていったという話である。ところが、泊まった人はほとんど兵庫県の人だとのことであった。

兵庫県や神戸の人は、良いところは自分で独り占めして、他の人に言いたがらないので、大型の観光キャンペーンはあんまりないと思う。住むところも密を避ける傾向にある。

住む人と仕事と、それ以外の時間をどう過ごすかということ、密という考えをはねのけてアイデアを出していくと、すごく素敵なアイデアが出てくる。テレワークということも、もちろん距離にとらわれない仕事の仕方、でも適度に便利で人間らしい生活ができる。

先ほど、農協の話が出たが、スーパーに行ってみてびっくりしたのが、野菜が今年の梅雨ですごく高くなっていて、実は兵庫県はあまり梅雨の被害にあっていないから、生産者の販売所に行ったら安くなっている。そういうことを、喜んだり悲しんだりしながら、地元に張り付いて、でも仕事としては製造業としても農業としても、もちろん我々IT業としても、仕事ができる環境はできてきた。インフラやテクノロジーがあることをベースに、まずは人間らしい生活をするということを中心としたまちづくりをしていくというのは、何十年も残る都市づくりの基準になるのではないかと思う。

東京から人が離れているのは事実である。IT業界も、一斉に本社事務所をなくして、みんな好きなところに住んでいいよ、とやっている。出社は週1回か月1回で、新幹線できたらいいじゃないかという。そうならば兵庫県や神戸に住んで、淡路で温泉も良いねという。ちょっと乱暴な言い方かもしれないが、20年、30年後はみんながそんな生活をしていると思うし、30年後には他の地域にとられないうちに神戸へ優秀な人間をたくさん呼べればと思う。

(委員)

地域力指標をみると、ボランティア等で社会のために活動している、またはしてみたいという人の割合が33%とあるが、この割合を1%でも上げていきたいというのが、CS神戸の一つの活動ミッションである。してみたいだけでなく、してほしいと、アクションしていただきたいということがあり、普段活動を行っている。

今日の資料の中で関連があるのは、人との繋がりが全県のデータに比べると神戸は少し低かったことが1つある。あと、今日はお示しがなかったと思うが、神戸は確か他の地域よりも単身者が多かったかと思う。1人世帯の方が多くて、少し孤立化しやすい状況が、都市部に行けば行くほどあるのではないだろうか。神戸はそういう状況を内包している都市なのではないかと思っている。

そういう中で、目を向けるべきまたは大切にしたい点を2点申したい。

1点目は、居場所と役割という言葉である。居場所はもちろん必要で、あればあるほどいいと思うが、それに加えて役割があるとないとでは全然違うのではないかというのが個人的な感想である。

助けてもらうばかりは、それはそれでしんどいということだと思っている。ありがとうと言いつけるのではなく、時には自分が担い手になってありがとうと言ってもらえるかどうか、そういう機会をたくさん作れるかどうかということがすごく大事ではないかと思う。

今日の論点の2枚目に、安全安心の都市「神戸」には社会的弱者にやさしいまちづくりというのがある。非常に大事なことであるが、サポートする側、される側を固定化しないことが一つ基本的な理念として大事であって、サポートされる側の人でもサポートできる側になれるという循環を作っていくことが大事だと思う。

もう一つは、協働である。これだけ社会課題がいっぱいあって、しかも少子高齢化で税収も減っているとすると、いかにレバレッジを効かせて、社会課題を解決していくかということに目も向けていく必要があるのではと思っている。一つの手法だけ、一つのNPOだけ、行政だけ、1つの企業だけということではなくて、共通するミッションや社会課題とか共有する部分に目を向けて、一緒にやっていくというマインドが大事だと思う。

色んなセクターがそれぞれ強みを持っているので、その強みを生かし合いながらレバレッジを効かせた仕組みを作っていくということが、大事ではないかと思っている。

組織同士の協働だけでなく、個人であっても同じである。同じバックグラウンドの人たちだけだと広がらない面白さみたいなものがある。異質なものと個人、組織と組むことで、広がるってことは何に対してもあることだと思う。そういうことを生かして、レバレッジを効かせながら社会課題を解決していく仕組みが出来上がっていくと、人との繋がりがカバーできたり、ボランティア等で社会のために活動している人の数がどんどん増えていくことになるのではないかなと思っている。

(委員)

災害と地域づくりの視点から話をさせていただく。

東日本など複数の被災地に行っている。そこで思うのは、神戸のように多くの防災機関を持っている自治体はないのではと思う。人と防災未来センターをはじめ、大学機関もたくさんの防災のことを持っていて、HAT 神戸には国際機関が沢山並んでいる。また、市民活動がされている方と震災から生まれた団体は、今も活動している団体がたくさんあると思う。そういう状況も、神戸の一つの特徴だと思っている。

これからも、国内様々な地域で災害がたくさん起こることが予想されるので、人と防災未来センターのような研究と伝承の施設が各地域には整備されることが難しいことを考えると、そういう面での発信力があるのではと思っている。

後、他の都市に比較できる分かりやすい神戸の資源では、医療機関やコンピューターがある。ただ、一般の市民にとって、医療機関は、難病にならないと最先端医療があると言われても分かりにくく、コンピューターに関してはそんなに一番でないといけないのかというように思うことあると思う。2つの施設は、効果が確実にあるから置かれていると思うので、効果を親しみやすく分かりやすく市民に伝えることが必要かなと思う。

質問の項目の大切にしたい点は何かということでは、これから若い方が集まられてデザイン会議でお話しをされるようだが、その話合いのプロセス自体の中で多様性を認めるというか、自分の分野だけに偏らず協力しながらやっていくプロセス自体が大切だと思う。

現代の課題は、展開が早く変わってきていると思うので、社会課題の連携、社会課題の解決に向けたトライアンドエラーを認め、神戸の魅力を、失敗も含めて色々な挑戦を全国に発信しており、全国に情報発信ができることも神戸の魅力ではないかと思っている。

(委員)

これから神戸の町をどう描いていくかだが、兵庫県全体の中で、神戸の町の役割や、暮らしている方々にとっての神戸の町の位置付けも非常に大切ではないかと思う。

神戸の町は今どうなのか。正直言って、昔の方がすてきだった。それは多分、神戸の町に来ると他の町では見ることのできないようなもの、雰囲気や色んな商品に沢山出会えたのだと思う。今の神戸の町に昔ほど魅力がないと思うのは何故かと考えると、多分日本全国、どの町に行っても同じようなものが手に入り、同じような風景があるというように変わってきたのかなと思ひ、少し残念である。

神戸は少しさみしくなったと思ひながらも、今も魅力を発信できるものは何があるかと思ひたときに、随分沢山あると思ひ。それを、これから30年後のビジョンを描くときに、さらに優れたものにしていくとか、あまり活用できてないようなものの活用を考える。例えば、六甲山の別荘地はどうなったのかと。行って見たらびっくりするほどの惨状で、驚くほど六甲山が寂れているが、こういうものをもっと活かすように考えていく。

神戸の魅力は、いかに、そこに暮らす人たちが町の生活が楽しめるかというところにあるのではないだろうか。食を極めるとかを具体的に積んでいくのはどうかと思ひ。

神戸には山もあり、少年団で六甲縦走の登山が行われている。そういう青少年に神戸の魅力、自然を十分に味わってもらえることができるなど、とにかく自分たちが手に持っているものを活用して、これからの町の姿を具体的に描いていきたい。

世界と兵庫県、そして、兵庫県の中の神戸市の関係、そして、神戸市が世界との繋がりをどういうふう持っているか。地元の市民力の問題や自分たちの持っている資産や自然にまつわる全てのものを十分活用するということを、課題に挙げたい。

(委員)

私からは3点ある。最初は抽象的な持論、二つ目は観光の視点で思ったこと、三つ目は前職が保健福祉局だったので、保健福祉という観点で話をしたいと思っている。

一つ目は、2050年に神戸をどのような地域にしたいか。今回のコロナを経験して、あったものがあつという間になくなることや、世界観が大きく自分自身も変わってきた。神戸の強みとして、ちょうどいい町、というのを極めていきたいと思っている。神戸の強みについて色んな専門分野から教えていただいたが、改めて神戸ってちょうどいいと思った。私は、半分は大阪、半分は神戸の人間なので、大阪の良さも悪さもよく知っているが、私が神戸に住んで、大阪に戻らないのが、やっぱり神戸はちょうどいいと思うからである。

ただ、競争力という意味では負けかけてきているというのも事実である。今後、目指す姿としてちょうどいい町を極めたら、あらゆるリスク回避ではないが、何かあったときに神戸が潰れない。守りの観点や視点かもしれないが、ちょうどいい町というのが持論である。

二つ目、観光という観点で2050年の神戸をどのような地域にしたいか。観光産業、非常に裾野が広い。1つホテルや旅館があれば、そこ契約している飲食店や、卸業者、クリーニングなど色々な雇用を生み出している。観光産業は、コロナなどで、浮き沈みがあるが、なくなならない産業の一つだと思っており、拡大していく必要があるかと思う。

コロナで考え方も振り出しのゼロに戻ってしまっているが、神戸観光局の戦略として、神戸は滞在型国際観光都市を目指すというのを言っていた。

インバウンドについても滞在型で、神戸に来てもらって1週間とか10日間ゆっくり神戸滞在して観光を楽しむ都市を目指そうと、暮らすように旅するというテーマで、観光戦略を立てていた。コロナでインバウンドがほぼ壊滅状態なので、今後の戦略は考えていく必要があるし、2050年にインバウンドが戻っているかどうかで、また考え方が変わらと思う。

しかし、神戸の強みは、「住みよい町」だと思うので、これは国内、海外問わずに、滞在型という、暮らすようにちょうどいいということを目指していけたらと思っている。

今後目を向けるべきものとして、神戸の観光資源は見直す必要があるかと思っている。海や山があることはずっと言われているが、私自身は人になるかと思う。減っていく人が、大げさかもしれないが、観光資源になるのではないだろうか。

まずは神戸の観光資源や観光コンテンツを、掘り下げる、再発見する、磨き上げるという作業が一つと、いかに「人」を観光資源という着目の仕方をして、神戸の観光コンテンツっていうのを作っていく、強みにしていくというのを考えていきたい。

3点目は、今後、絶対切り離せない人口問題で、シルバーパワーの活用についてである。子育てや教育はとても大切なことだが、両立して、シルバーパワーの活用を今後考えていかなければと思っている。平均寿命も伸びており、併せて健康寿命も伸びてきている。昔で言う高齢者は、皆さん元気なので、このシルバーパワーの世代が活躍できる町はどうか。

雇用の問題もそうだが、ボランティアがしたいというパーセントも上がっているし、無償、有償問わないボランティアで、まだまだ働ける人は働いてもらうのもいいことだと思う。

保健の関係でいうと、雇用と健康はエビデンスも出ているので、若い世代が減ってきて、全体の人口も減ってきている中で、シルバーパワーをどう活用していくかが必要だと感じている。

(委員長)

初回なので、ビジョンの役割を一つ確認させていただければと思う。

今日のお話の中で30年後はどうなっているかよく分からないと、これは確かに正直なところだと思う。我々は未来予想予測をするわけでは多分ないだろうと思っている。つまり、30年後はどうなっているだろうねという話はしない。社会が変わっていくのは事実だと思うが、一方で、人間の生活の基本はあまり変わらないということだと思う。それは教育であり、人との繋がりであり、医療の問題であり、農・食の問題であり、ものづくりの問題であり、そして市民が繋がるという、そういう部分とあんまり変わらない。社会がどう変わろうとも、人間らしく暮らす、それを実現していくために神戸はどうなって欲しいのだろうか。それを考えていくのがビジョンの役割だろうと思う。

今日お話の中にもあったが、神戸の育んできた、或いは神戸が蓄積してきた良いものを、次の世代の社会課題の解決にどうつなげていくのだろうかということを、まとめていくような役割が、おそらくビジョンにはあるのだろうと考えている。

そうしたときに、今の神戸にある良いものや、神戸に残っている育んできた良いものは何だろうか。或いは逆に足りないものや少ないもの、もっと必要なもの、或いは今はないけれど必要なものって何だろうか、それは将来どうしていこうかということ、伺っていくという進行になるだろうなと考えた次第である。